

## ◆ これまでの木育サミット

- 第1回 2014年3月16日 会場：東京学芸大学芸術館（東京都小金井市）テーマ：『語り合おう 木育の「今」と「未来』』
- 第2回 2015年1月27日 会場：新宿文化センター大ホール（東京都新宿区）テーマ：『木を繋ぐ 木で繋がる 木から始まるコラボレーション』
- 第3回 2016年3月11日 会場：レザンホール・塩尻市文化会館（長野県塩尻市）テーマ：『木育を「アルプスの麓」から考える』
- 第4回 2017年2月23日 会場：ティアラこうとう（東京都江東区）テーマ：『日本の未来を木育が創る』
- 第5回 2018年2月24日 会場：秩父宮記念市民会館（埼玉県秩父市）テーマ：『あらゆるライフステージを木育で彩る』
- 第6回 2019年2月16日 会場：あわぎんホール（徳島県徳島市）テーマ：『四国の森から始まる「木育」の話』
- 第7回 2020年2月8日 会場：木材会館（東京都江東区）テーマ：『木育が創る・動かす 日本の未来』
- 第8回 2021年2月 オンライン開催 テーマ：『持続可能な社会のために木育にできること』
- 第9回 2022年2月 オンライン開催 テーマ：『つながる木育 つなげる木育～SDGs達成と持続可能な社会の実現を目指して～』

## ◆ 主催者紹介

### T 東京おもちゃ美術館

東京おもちゃ美術館は、おもちゃを手にとり、触れて、遊ぶことができる体験型の美術館です。手作りおもちゃを作ることができる「おもちゃこうぼう」や季節のイベントなど、子どもだけではなく、赤ちゃんから大人まで多世代で楽しめる、さまざまなコンテンツを取り揃えております。また、国産の木材のみで作られた「おもちゃのもり」や、赤ちゃんが木の匂いや触り心地をふんだんに感じることができる「赤ちゃん木育ひろば」では、木育にふさわしいコンテンツを提供しております。



〒160-0004 東京都新宿区四谷4-20 四谷ひろば内  
tel:03-5367-9601  
fax:03-5367-9602 <https://art-play.or.jp/ttm/>

## ◆ 木育情報のポータルサイト：木育ラボ

### もっと知りたい！ 木育のこと ウッドスタートのこと

木育の行動プランの一つである「ウッドスタート」をはじめ、様々な団体が展開している木育の取り組みを紹介、発信しています。全国で木育を推進している組織・団体を結びつけ、より強固な木育ネットワークの構築を目指します。

<https://www.mokukulabo.com/> 木育ラボ 検索



## ◆ SDGsに関する取り組み

東京おもちゃ美術館では「ウッドスタート」をはじめとする木育活動を通して、地域の森への関心を高めるだけでなく、林業、林産業の活性化、川上と川下のネットワークづくりなどにも貢献していきます。

### ◆ 目標達成貢献の3つの取組 ◆

- ①全国各地の森林資源を活用して地方創生に結びつけること
- ②様々なステークホルダーが参画することで環境保全に結びつけていくこと
- ③子育て支援の一環として暮らしを豊かにしていくこと



10th

# 第10回 木育サミット

2022年12月 オンライン開催

## 沖縄木育サミット

2023年1月15日  
琉球新報ホール

### 林野庁補助事業 実施報告書

T 東京おもちゃ美術館

△ 芸術と遊び創造協会

主催：特定非営利活動法人 芸術と遊び創造協会／東京おもちゃ美術館

## ◆ 木育サミット 配信スケジュール

日 稲	時 間 ・ 企 画
2022年11月～	◆主催者よりウェルカムメッセージ
2022年 12月2日～ 2023年 1月31日	<p>◆木育スペシャルトーク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>I 【特別鼎談】『「東京」が地球を救う？都市部で木を使うことの意義を考える』 椎川 忍（一般財団法人地域活性化センター理事長） 庄司 良雄（東京木材問屋協同組合 理事長/一般社団法人 東京都木材団体連合会 会長） 山梨 知彦（株式会社日建設計CDO常務執行役員） 進行：馬場 清（特定非営利活動法人 芸術と遊び創造協会）</li> <li>II 【基調報告】『カーボンニュートラル時代、木育の新時代を拓く』 山下 晃功（島根大学名誉教授）</li> </ul> <p>◆木育トップリーダートーク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 【特別対談】『カーボンニュートラル実現に向けた木材利用と木育推進の意義』 織田 央（林野庁長官） × 多田 千尋（東京おもちゃ美術館館長）</li> <li>(2) 【木育に取り組む「ウッドスタート宣言自治体」のリーダーへのインタビュー】 『群馬県の森づくりと木工による地域づくり－木育の視点から－』 山本 一太（群馬県知事） × 黒澤 八郎（上野村村長） インタビュアー：長谷川 泰治（株式会社長谷川萬治商店）</li> <li>(3) 【木育に取り組む「ウッドスタート宣言自治体」のリーダーへのインタビュー】 『塩尻市の木育 10年のあゆみと展望』 百瀬 敬（塩尻市長） × 海津 健司（塩尻商工会議所） インタビュアー：酒井 慶太郎（酒井産業株式会社）</li> </ul> <p>◆姉妹館連動企画</p> <p>『おもちゃから考える森のこと』 in 木曾おもちゃ美術館 ナルカリ（ナルカリクラフト） 岡田哲也（特定非営利活動法人 芸術と遊び創造協会）</p>
2022年 12月17日（土）	<p>13:00～14:30 ◆記念講演『森の市民をつくる～森・里・川・海そして都市をつなぐために～』</p> <p>15:00～16:30 『ウッドショック下での福岡おもちゃ美術館の挑戦 ～地方おもちゃ美術館の10年後の未来を示す～』</p>
2022年 12月18日（日）	<p>13:00～14:30 『森林に新たな価値を創造する』</p> <p>15:00～16:30 『木育さん、いらっしゃい！～「行動変容」に繋がる木育とは～』</p>

## ◆ 協 賛 ・ 後 援

協賛：東京原木協同組合／東京木材問屋協同組合／東京木場製材協同組合

後援：一般財団法人 地域活性化センター／公益財団法人 森林文化協会／日本木材青壯年団体連合会／一般社団法人 全国木材組合連合会／国際木文化学会／一般社団法人 日本木文化学会／チルチンびと「地域主義工務店」の会／一般社団法人 JBN・全国工務店協会／一般社団法人 全国林業改良普及協会／全国森林組合連合会

## ◆ 木育推進委員会（五十音順・敬称略）

青木 亮輔 株式会社 東京チェンソーズ	金原 望 株式会社 未来工房	水谷 伸吉 一般社団法人 more trees
青野 裕介 株式会社 Tree to Green	川畑 理子 株式会社 グリーンマム	三瀬 宏土 杠建設株式会社
赤野 孝一 学校法人聖母女学院	木村 祐太 株式会社 竹中工務店	望月 さやか 一般財団法人 地域活性化センター
一條 達雄 一條木材株式会社	酒井 慶太郎 酒井産業株式会社	山下 晃功 島根大学
大谷 忠 東京学芸大学大学院	菅原 和利 株式会社 東京・森と市庭	
小友 康広 株式会社 小友木材店	長谷川 泰治 株式会社 長谷川萬治商店	

## ◆ ウェルカムメッセージ

主催の特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会 理事長 多田千尋より、オンラインによる木育サミットへの参加を呼び掛けるため、ウェルカムメッセージを配信した。

- ◆ 配信期間：2022年11月22日～2023年1月31日
- ◆ 配信方法：ホームページおよびYoutubeでの配信



## ◆ 特別対談 『カーボンニュートラル実現に向けた木材利用と木育推進の意義』 織田 央（林野庁長官）×多田 千尋（東京おもちゃ美術館館長）

### 【1】企画の趣旨

森林によるCO2吸収や木材の炭素貯蔵といった機能の重要性があらためて認識され、森林資源を循環利用し木材利用を拡大することでカーボンニュートラル実現に貢献することが期待されている今、木の良さを伝え、暮らしに木を取り入れることを提案する「木育」に携わる私たちが取り組むべきことはなにか、現状を整理しながら議論した。



### 【2】概要

**森林経営管理法と森林環境譲与税** 森林経営管理法が必要となった一番の要因として、木材価格の低迷と森林所有者の経営管理の意欲の低下、経営管理をする意志のない所有者が増えたということが挙げられる。そういった森林の整備を進めるための財源として森林環境譲与税は活用される。令和元年からスタートした森林環境譲与税は半分ほどが基金に積まれている状況もあるが、経営管理制度を動かすための準備として必要であることも要因としてあるため、今後有効活用が進むと考えられる。その一方で市町村の人員体制も問題となっているが、地域林政アドバイザー制度や相談窓口を活用して克服されることを期待している。また森林環境譲与税を人材育成や木材利用の普及啓発としての木育活動への活用も歓迎される。

**ウッドショック** アメリカの住宅需要や海上輸送コンテナが確保できなくなった等により、国産材に代替需要が発生して国産材の価格も上がった。製材工場はフル稼働で増産を進めたが、更なる増産には追加投資も必要でサプライチェーンを組まなければならない。中長期的な視点で、川下とのサプライチェーンを作りながら投資していくということを促すような対策を進めている。

**川下の意識醸成** 投資をしてサプライチェーンを確立するために、出口対策として木の良さ、木材利用の意義を国民が理解することがベースとして非常に重要である。最近は森林・林業とは遠い業種の民間企業が森林整備や木材利用に関心を持つようになってきている。SDGs、ESG投資の流れや2050年カーボンニュートラル宣言により、木材利用が地球環境にも貢献するという理解が促進されたのではないか。また木材利用促進法が契機となって、大規模建築が木材で建てられるようになっている。

### 【3】まとめ

木材には調湿機能や香りによるリラックス効果等、木材利用による人に対する効果はもちろん、木材利用によって日本の森林、林業、山村が元気になること、炭素貯蔵機能や少ないエネルギーで加工できる環境負荷の少ない資材であることも理解して、木と触れ合ってもらいたい。また自治体においてはウッドスタートの輪を広げ、森林環境譲与税も有効に活用されることが望まれる。



織田 央 林野庁長官  
長崎県出身。東京大学農学部卒業後、農林水産省へ入省。  
林野庁森林整備部計画課長、林野庁森林整備部長、林野  
庁国有林野部長を歴任。2021年林野庁次長に就任。  
2022年7月林野庁長官に就任。



多田 千尋 東京おもちゃ美術館館長  
特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会理事長、東京おもちゃ美術館館長、高齢者アクト  
ティビティ開発センター代表。年間入館者数10万人を超える、木育のシンボル「おもちゃ  
美術館」は東京、沖縄、山口、岩手、静岡、徳島、香川、福岡、高知など2023年までに全国  
12館が創設され、赤ちゃんからお年寄りまでの多世代交流のけん引役も務める。

## ◆木育スペシャルトーク

### ◆【特別鼎談】「東京」が地球を救う？都市部で木を使うことの意義を考える

#### [1]企画の趣旨

2020年10月、我が国では、2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロとする「カーボンニュートラル」を宣言した。そこで本企画では、木材消費において大きな役割を担う都市部での木材利用の意識醸成をテーマに、3人の方に議論していただいた。

#### [2]概要

まず今回の鼎談の会場となった木材会館を設計された日建設計の山梨知彦氏には、2015年頃から木造建築物や木質化への興味関心はかなり強くなってきたことを、具体的な事例に基づき話していただいた。その上で、今後木材の消費量を増やすために①仮設建築物②ビルの低層部③ビルの外装④ビルの最上階の木質化について提案があった。次に会場提供にご協力いただいた東京木材問屋協同組合理事長の庄司良雄氏からは、1981年から続けている「木と暮らしのふれあい展」の紹介があった。このイベントを通して、東京都民を中心とした一般消費者が、暮らしに木を取り入れるようになってきているという。さらに今後は「木の効果」についての科学的根拠を元に、木の良さを都市住民に伝えていきたいとの意気込みが語られた。3人目は、東京おもちゃ美術館と木育に関する連携協定を締結している一般財団法人地域活性化センター理事長の椎川忍氏である。椎川氏からは、全国の林業地域と都市部の自治体間連携が進むことによって、森林環境税の創設、公共建築物木造化の法整備等と相まって、森林の価値が少しづつ知られるようになってきているとの指摘があった。

#### [3]まとめ

3名が異口同音に語られたのは、ここ数年の「都市部住民の木の消費への関心の高さ」である。これまで「点」として行われていた「木育」の活動が、「面」となり、人間が本来持ち合わせている自然を受け入れる「感性」と書き合うことで、「木を使う」という文化が定着しつつあるとの認識が示され、討論を終えた。



山梨 知彦 株式会社日建設計 CDO 常務執行役員  
1984年東京藝術大学建築科卒業。1986年東京大学大学院修了。日建設計に入社。現在、チーフデザイナーオフィサー、常務執行役員。建築設計の実務を通して、環境建築やBIMやデジタルデザインの実践を行っているほか、木材会館などの設計を通じて、「都市建築における木材の復権」を提唱している。日本建築学会賞、グッドデザイン賞、東京建築賞などの審査員も務めている。



椎川 忍 一般財団法人地域活性化センター理事長  
秋田県出身。東大法卒。1976年自治省入省、総務省自治大学校長、地域力創造審議官(初代)、自治財政局長などを歴任後、(株)日立製作所を経て地域活性化センター理事長就任。他、移住・交流推進機構業務執行理事、内閣官房地域活性化伝道師、総務省地域力創造アドバイザーも務める。羽黒古修駿道山伏善永(七度目、先達)。総務省在職中は、地域おこし協力隊を創設するとともに、「緑の分権改革」(あるものを生かす地域力創造)の基本的な考え方を確立した。



庄司 良雄 東京木材問屋協同組合理事長・一般社団法人東京都木材团体連合会会長／創立100年以上の歴史と伝統を誇る組合の理事長として、木のまち新木場において「木材会館」を運営すると共に、木材の優しさ・強さ・美しさを具現化したランドマークを通じて、都市建築における木材利用を推進している。また、木材需要拡大に向け、木の良さを科学的データに基づき数値化し、一般消費者に広く発信するため、千葉大学との共同研究に取り組んでいる。



進行：馬場 清 特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会 事務局長  
1963年東京都生まれ。高校、大学の教員を経て、2010年4月、特定非営利活動法人 芸術と遊び創造協会事務局長に就任。東京おもちゃ美術館が進めている「ウッドスタート」の取組において、全国の自治体と組んで、木育推進に取り組んでいる。

### ◆【基調報告】カーボンニュートラル時代、木育の新時代を拓く



#### [1]企画の趣旨

木育に関わる方々がベーシックなレッジとして立ち返ることのできる、森林・樹木と地球温暖化防止に関する基本的な知識と「木育」のはじまりと歩みを網羅した。

#### [2]概要

第1部 「木育年表」で木育25年の振り返り 前期：1997年、京都議定書が採択され、森林の地球温暖化防止機能が国際的に認められ木育の発端となる。2005年に京都議定書発効、林野庁による「木づかい運動」がスタート。公文書の森林・林業基本計画(2006年)に「木育」が初めて記載された。中期：2007年に木育推進体制整備総合委員会発足、2010年「木育円卓会議」「木育キャラバン」「姉妹おもちゃ美術館事業」など木育新規事業がスタート。後期：木材利用促進法が制定。2019年に地球温暖化防止・森林整備+木育普及を目的とした森林環境譲与税が制定され、促進法や税制が追い風となる。木材利用促進法の改正で地球温暖化防止のための木材利用が明文化された。

#### [3]今までの木育の反省点

木育活動に取り組む目的を示した「木育か・き・く・け・こ」のうち、環境についての木育事例が極端に少ないことが判明し、森林と地球環境保全の理念のない活動が多かった。これからは樹木光合成の機能「炭素の固定・貯蔵」を基にした普及啓発活動を進め、木育の発端となった森林の機能を再考し、森林・林業基本計画における木材利用の意義を再確認する必要がある。

#### [4]木育新時代に向けて今後の改善点

今後は、木育活動が「楽しくて面白い」必要条件と、「森林・地球環境に貢献することを学ぶ」十分条件を満たすことが必要になる。木育の新時代を拓くために、カーボンニュートラル時代と脱炭素社会の実現に対応した木育活動の啓発を進め、全国に広がることを心より願っている。



山下 晃功 島根大学名誉教授/1945(昭和20)年10月岐阜県揖斐市生まれ。島根大学名誉教授 木材加工教育専攻。2007(平成19)年～2010(平成22)年林野庁木育推進体制整備総合委員会座長。現在も島根大学公開講座「生涯木育(成人向け)」を主宰し、木育人材育成を実施。「木工革命一合板・DLモジュール木工」(海青社)など著書多数。

## ◆木育トップリーダートーク

### ◆群馬県の森づくりと木工による地域づくり～木育の視点から～

#### [1]企画の趣旨

2020年、群馬県は木育推進を目的にウッドスタート宣言を行い、沼田市他1町2村(2023年1月末現在)のウッドスタート宣言市町村と連携し、森林資源の活用推進を行っている。群馬県は、各市町村での活動を面で繋ぎ、木育に携わる人材育成にも積極的に取り組んでいる全国トップレベルの木育推進県である。今回のインタビューでは、県として木育をリードしている県知事 山本一太氏と、いち早くウッドスタート宣言を行った上野村村長黒澤八郎氏をお迎えし、木質空間であるスタジオ tsulunos(県庁内)にてインタビューを行った。



#### [2]概要

インタビューでは、県知事よりマクロな視点から見た森林資源活用に関するご意見を伺い、村長から現場での具体的な活動について詳細を伺った。なおファシリテーターは、(株)長谷川萬治商店の長谷川氏が務め、県と村の双方が各自どのような役割を担って、木育推進に取り組んでいるのか全国のモデルとなる事例として話を掘り下げた。山本知事からは「県の森林・林業基本計画で木育推進を柱に据えることによって、県下に木育に関する意識を広げていきたい」といったお考えを聞かせていただいた。黒澤村長からは「木育を切り口に、子育ちをコンセプトとした教育環境を整えるために遊具整備や木育キャラバンを実施している」という活動について語っていただいた。

#### [3]まとめ

インタビューでは、木育を切り口として、県と市町村が連携しながら事業を拡大することで、県全体で林業の発展を推進していることが分かった。面で木育推進を行うトップリーダーの考え方やそれぞれの役割、点の活動となる具体例を紐解くことで、全国の森林資源活用を広げていくヒントを得られた。



山本 一太 群馬県知事  
1958年生まれ。群馬県草津町出身。1985年、米国ジョージタウン大学大学院国際政治学修士課程修了後、国際協力事業団(JICA)国連開発計画(UNDP)勤務。1995年参議院議員初当選。外務副大臣、内閣府特命担当大臣、参議院予算委員長等を務める。2019年7月、群馬県知事に就任。「県民の幸福度の向上」実現のため、年齢や性別、国籍、障害の有無等にかかわらず、すべての県民が、誰一人取り残されることなく、自ら思い描く人生を生き、幸福を感じ実感できる「自立分散型の社会」の構築を目指す。



黒澤 八郎 上野村村長  
1961年生まれ。群馬県上野村出身。1980年、群馬県立万場高等学校卒業後、上野村役場へ入庁。企画財政課長・振興課長、総務課長を歴任。2017年6月、上野村長に就任し、現在2期目。暮らし・子育て・福祉・経済の安心を柱として、村民と共に、「全ての世代が、安心して暮らせる村づくり」を目指す。



インタビュアー：長谷川 泰治  
株式会社長谷川萬治商店 代表取締役執行役員社長／学生時代にAIを学びソニー株式会社に就職。国内外の工場にセル生産方式の導入を推進する生産革新に従事。2009年に同社に入社。流通、加工、建築施工まで一貫体制でサービスを提供できる強みと、生産革新と木育を基盤とした経営により新しい時代の木材業の構築を目指す。同時にウッドスタート宣言をした群馬県上野村と協業し木育の推進や木製品の販売を行っている。

### ◆塩尻市の木育 10年のあゆみと展望

#### [1]企画の趣旨

漆器産業の再興、森林再生、子育て支援といった地域課題を「木育」によって結び付け、10年に渡って継続してきた塩尻市の取り組みを振り返るとともに、今後の展望について伺った。インタビューは、漆の産地・植川地区にある塩尻市立植川小中学校の木質化されたランチルームで行った。



#### [2]概要

まず百瀬市長から、塩尻市の産業の特徴として製造業や農業、そして400年以上に渡って伝統が受け継がれている木曽漆器について説明があった。市内の森林は80%以上が50年生以上の木で占められ、成熟期を迎えており、木質バイオマス等による森林資源の活用と地域循環型社会の実現を目指して事業を進めている。続いて海津氏より、塩尻工商会議所では、漆器産業を支えた森林の木材生産機能の低調、また漆器需要低迷という課題解決の糸口として、「木育」による森林再生への市民の理解増進や伝統産業の販路拡大を推進してきたことが語られた。具体的な活動として民間事業者による「木育フェスティバル実行委員会」の発足や、塩尻市が長野県初のウッドスタート宣言(2013年)をしたことがある。

#### [3]まとめ

海津氏は、木育の原点には、CO2削減や環境問題があるとし、商工会議所では林業の「業」を再生することで仕事や雇用が増え、地域が再生されることが木育に取り組む最終目的と考えている。行政と連携し森林整備によって人が森の中に入ることができる環境づくりも重要だと述べた。百瀬市長は、木育は一つの自治体だけで取り組むのではなく、全国に木育を取り組む自治体が増えてこそ仕組みができる上があるものであるとし、木育サミットを通じて木育の輪が広がってほしいと展望が述べられた。



百瀬 敬 塩尻市長  
昭和45年5月生まれ。松本県ヶ丘高校、日本大学法部政治経済学科卒。平成5年に塩尻市役所に入庁。企画課・情報推進課、観光課などに所属。平成29年から産業政策課長、令和2年からは産業振興事業部長を務め、令和4年3月に退職。令和4年10月1日塩尻市長に就任。



海津 健司 塩尻工商会議所事務局長  
オムロン(株)実家である(有)上写真店の代表取締役・プロカメラマンを経て、平成21年、塩尻工商会議所入社。市役所出向中に経理課長・課長を経験し、現在塩尻工商会議所事務局長を務める。木育フェスティバル実行委員会の事務局として、9回のフェスと6回の森のフェスティバルを開催し、平成28年には第3回木育サミットの開催地として、東京おもちゃ美術館に協力。その他に商店街振興事業であるまちゼミ(塩尻版はシリゼミ)を平成24年に立ち上げ、事業所主体の事業として支援をおこなっている。



インタビュアー：酒井 康太郎  
酒井産業株式会社 代表取締役社長  
長野県塩尻市木曾平沢(旧植川村)出身。宝飾業界での修行期間を経て、木曽漆器業界に4代目を就任。木曽漆器から木竹生活用品また木育玩具類を全国の生産者グループと企画開発販売。自然のぬくもりをくらしの中に」を社是に、森と人の暮らしを繋ぐのが役割と日々事業に取り組んでいる。

## 森の市民をつくる～森・里・川・海そして都市をつなぐために～



### [1]企画の主旨

私たちの世界は人間だけではなく、山や川や海と人々の暮らしがつながり、他の生物とも関わり合いながら営まれている。養老孟司氏より、山や森などの自然が人間の暮らしと繋がっていること、都市の人が森を感じるためにどうしたらよいか、を考える機会としてご講演頂いた。

### [2]講演概要

日本は非常に森が豊かな国だが、そう考えている人は少ない。現代では休日に山に親しむこともあるが、普段の生活の中に必然として森が入ってきていない。例えば、戦時中は森に親しもうというわけではなく、日常生活の中でどうしても森に親しまざるを得ない状況だった。環境問題が唱えられているが、身近に感じられずピンとこないのは問題が抽象的で身に染みて感じられないからである。日本は天災の多い国で、2038年には南海トラフ地震も予測されている。災害で流通が止まることを考えると、地域で日常を確保できるように「自給」の方法を考えなければならない。いま当たり前だと思っている生活が天災によって変わってしまった時に、外国の資源に頼らず、地域の中で自分で日常を確保しなければないと考えると、日本の資源は森林しか思い浮かばない。「復興」を新しい生活を考えるためのきっかけとしてとらえ、災害後の日常を自分で確保するように考えていかなければならない。地域が自給し、自分で考える「自立」を個人がしなければならない状況で初めて、周りにある森という資源をどう使っていくかが見えてくる。

自分の生活にどのように森が必然的に入り込んでくるか、上手に自然と付き合ってきたのが人間の歴史である。そのため、都市の人が一年のうちの一定期間を自然の中で過ごすことが、頭と体のバランスにとって大事なことだ。災害時にトイレも使えない、食料もない状態になったときに自分の手でできることがあれば非常に気持ちの支えになる。自分の日常にどう上手に自然を取り込んでいくのか、その生活を今から考えておくことが必要である。

### [3]質疑応答

参加者からの質疑を拾い上げ、進行の青木氏と養老氏との対話形式で回答いただいた。東日本大震災やコロナ禍で生活を根本から考える人が増え、自然に対して救いを求め、檜原村を訪れる人が増えた。自然への行き先を持っている人はいいが、行き先のない人は天災が起きて初めて自然との関わりに気がつくだろう、と養老氏は言う。そうすることで抽象的になっていた水・食料・エネルギーなどはどう確保されているのかを初めて考える機会になる。災害が起きた時に自分で判断できるように子どもたちを育てることが大切である。日本はいつ災害が起るか分からぬ国であり、起ったときにどうするかを考えているが、問題はその後平和になったときの社会の動きだ。歴史を見ていると災害時に社会が大きく変わっているため、復興時こそ自分の国に適した生活を考えいかなければならない。

青木氏からは檜原村へ移住した際に、仕事である林業を通して年配者との会話を盛り上がった経験から、話題を考えて移住先の住民とコミュニケーションをとることが、自然の多い地域への移住のポイントであると助言いただいた。

最後に養老氏より、「木で作られたものは人間の五感で感じられるものであり、そこに木育の価値がある。災害に備えて資源や費用を使うのは自分で考える訓練にもなる。みんなで考えて自分の居心地のいい世界をつくることが大事だと思う」と木育に取り組む方へのメッセージをいただき、記念講演が閉幕した。



養老 孟司 東京大学名誉教授  
1937年神奈川県鎌倉市生まれ。東京大学名誉教授。専門は解剖学。『バカの壁』(新潮社)で毎日出版文化賞を受賞。京都国際漫画ミュージアム名誉館長。NPO法人「日本に健全な森を作り直す委員会」や、一般社団法人「養老の森での活動を通じて、森をつくり直し、森・里・川・海のつながりの中で暮らしを問い合わせ直す取り組みを進めている。主な著書:「バカの壁」「養老訓」「ほんとうの環境問題」(新潮社)



進行: 青木 亮輔  
株式会社東京チェンソース代表取締役／MOKKI 株式会社代表取締役／檜原村木材産業協同組合理事長／東京農大卒。「小さくて強い林業」を目指し、高付加価値型林業に取り組む。

### [1]企画の趣旨

2020～2021年にかけてウッドショックが起き、各種木材の入手が困難になる等の影響がある中、地域の木材と技術が結集し、2022年4月に福岡おもちゃ美術館がオープンした。本企画では、福岡おもちゃ美術館の設立にかかわった5人のパネリストを迎え、ウッドショック下での木育の意味と、地方おもちゃ美術館の10年後の未来を考える。

### [2]各報告概要

#### 福岡おもちゃ美術館の概要

福岡おもちゃ美術館は、全国で初の民間企業が誘致したおもちゃ美術館として、大型商業施設「三井ショッピングパークららぽーと福岡」内にオープンした。床面積およそ1,500m<sup>2</sup>と日本最大の広さを誇る館内では、床や大型遊具に樹齢100年のスギやヒノキ等の福岡県産木材がふんだんに使用されている。遊び場は全部で10のエリアに分かれており、木の温かみや魅力が広がる空間で世界中のおもちゃを楽しむことができる。また、地元の大川家具職人によるギャラリーコーナー「OKAWA FACTORIA」も併設されており、来て楽しい、買って楽しいが両立した施設となっている。



#### 開館までのストーリー

2019年度にららぽーと福岡を手掛ける三井不動産が、特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会へおもちゃ美術館を設立したいと相談されたのが、福岡おもちゃ美術館の始まりである。これまでのおもちゃ美術館は、廃校活用など市街地とは少し離れた場所に設立することが多かった。福岡おもちゃ美術館は、商業施設にできる初めての美術館ということで、木育に関心のない人でも気軽に訪れるができるなどの期待が寄せられていた。当時、東京おもちゃ美術館の石井今日子氏(現福岡おもちゃ美術館館長)はこの相談を受け、福岡で林業を営んでいる株式会社アサモクの多田啓氏に声をかけたことから本格的に建設計画がスタートする。多田氏をきっかけに、製材を担当する株式会社ウエキ産業の植木啓能氏、什器製作を担当するENsower(エン・ソワー)の田中智範氏、施工管理を担当する杠建設株式会社の三瀬宏士氏に声がかけられた。商業施設内での建設はスケジュールや材料の運搬などの制約が多く、多くの苦労があったが、石井氏を含め普段から信頼関係がある5人だからこそ、苦労を乗り越えグランドオープンできたり笑顔で語られた。オープン後は、380名を超えるボランティアスタッフが集まるなど、様々な人々の思いに支えられ、期待どおり来館する多くの人々を魅了する木育施設となっている。

#### ウッドショックと木育

新型コロナウイルスの感染症の影響により2020年から始まったウッドショックは、輸入材に頼る日本の木材供給量や木材価格に大きな影響を及ぼした。福岡おもちゃ美術館では、地元の木材を確保する必要があったが、木材の手配を担当した多田氏はウッドショックの影響を受ける在庫や価格を予測し、自社林の材を提案した。木材が不足しているウッドショックだからこそ自身が所有していた山と木に目を向けることができたと話す。最近は自然災害が多発していることもあり木育への関心が高まっているが、ウッドショックも木育への関心を高める新たなきっかけの1つと捉えられている。

#### おもちゃ美術館の未来の姿

ウッドショックを乗り越えて建設された福岡おもちゃ美術館は、今後、都市と山をつなぐ玄関となることが期待されている。ウッドショックをきっかけに地元の山に目を向けることができたように、木のおもちゃにふれあい、どこのどんな木から作られているのかという関心を引き立て、山に関心を持つ人が増えてほしいとの願いが込められていた。おもちゃ美術館をきっかけに、木の循環などの環境問題を考え、人だけでなく山にもいい影響を与える木育へつなげることが、おもちゃ美術館の目指す姿であると語られた。

### [3]討論まとめ

本企画では福岡おもちゃ美術館がオープンするまでのストーリーを基に、ウッドショック下での木育とおもちゃ美術館の未来の姿を深掘した。すべてのパネリストの根底には「今の子供、未来の子供たちのために」という強い気持ちがあった。その強い気持ちを受けた子供たちが成長し、次の世代にもその気持ちが受け継がれていくことを期待したい。また、台風や豪雨などの自然災害が多い九州だからこそ、木育の持つ意味は大きく、福岡おもちゃ美術館をきっかけにさらなる木育の発展を期待する。

記録: 松原 輝(地域活性化センター・熊本県菊池市より派遣)



田中 智範 ENsower(エン・ソワー)代表

柳川高校卒業後、株式会社丸仙工業へ入社。2022年6月に退社し、ENsowerを創業する。ENsowerは、「ご縁+sower(種蒔くん)」、「ご縁の種を蒔く人」という意味を持ったおり、人と人のご縁が生まれ出す革命的な付加価値の創造によって地域の歴史・文化や環境を守り、100年の子どもの笑顔の実現に挑戦している。協同組合福岡・大川家具工業会地域材開発部会の部会長も務めており、福岡おもちゃ美術館の什器製作に携わる。



多田 啓 株式会社アサモク代表取締役社長

福岡県朝倉市で木材・建材販売、福岡市内でオフィスビル管理・駐車場経営を手掛ける。平成29年九州北部豪雨で先祖代々の山林の被災をきっかけに、自伐林家スタイルの山林管理を始め。日本木青連で木育や災害復興支援、ウッドランプフォーム商品の開発や普及に携わる。企業・業界活動を通して、一般向けの植栽・木育事業や木材業界の社会への啓発を行っている。「都市と山林をつなぐ」がライフワーク。福岡おもちゃ美術館では、木材の手配に携わる。



三瀬 宏土 枠建設株式会社専務取締役

2005年西南学院大学卒業後、三菱UFJ銀行に入行。2016年有限会社三瀬製材所に入社。2020年枠建設株式会社を設立。木材や建材の販売・建築工事の請負を行う。木材界の発展や地域社会の発展なくして自社の発展なしを理念とする。2022年度福岡県木材青年会議員連合会会長、一般社団法人久留米青年会議所防災・減災委員会委員長。福岡おもちゃ美術館の施工監理に携わる。



植木 啓能 株式会社ウエキ産業代表取締役社長

福岡県出身。2004年に株式会社ウエキ産業に入社。同年、国産材内装建材事業の立ち上げを行なう。全国の工務店に室内ドアや杉・ヒノキ・センドンの巾ハギ集成材をメインとし、販売を展開。2019年より通信販売最大手企業と協業し、一般消費者向けに国産家具の販売に着手。「国産材の可能性を無限化する」をコンセプトに国産材普及促進活動を行う。福岡おもちゃ美術館では原木の製材及び床板加工や什器素材の提供に携わる。



石井 今日子 福岡おもちゃ美術館館長

特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会運営。福岡おもちゃ美術館立ち上げ、赤ちゃん木育ひろば運営に携わる。おもちゃコレクションによる子育てサロン「おもちゃの広場」「赤ちゃん木育寺子屋」を開催。企業のコラボにより無印良品「木育広場」。日本財団との共同事業、難病児向けおもちゃセット「あそびのむし」の展開。Eテレ「まいにちスクスク」出演。



座長: 青野 裕介 株式会社Tree to Green

大学卒業後、金融・コンサルティング・環境エネルギー業界を経て2013年に(株)Tree to Greenを設立。長野県木曾郡を中心に、国産木材の需要拡大と地域の活性化、木育普及に積極的に取り組む。2022年4月からは木曾郡木曾町に自社工場の運営をスタート。2015年より木育推進委員会委員を務める。

## 森林に新たな価値を創造する

## 【1】企画の趣旨

「まちで木をつかう人が増えるしくみづくり」を実践している3名とファシリテーターを交えて、暮らしにおける木の魅力や、消費者の視点に立った森や木の需要について議論する。林業地と都市部の交流、一般の人が参加できる山づくり、誰もができる木のものづくりなど、それぞれが取り組む事例や根底にある考え方を伺い議論を深めることで、林業側が都市住民やくらしに対して提案できる切り口を探る。



## 【2】各報告概要

株式会社ソマノベース 代表取締役 奥川 李花 氏

同社の製品「MODORINAE」は、苗木をどんぐりから自宅で2年間育て、成長した木を森に返し植林することができる。人と森の循環を生み出すことで、森林への関心、愛着を持ってもらいたいという。熊野古道沿いにどんぐり回収ボックスを設置し、地域や観光客に拾ってもらったどんぐりを苗木にするプロジェクト。「三度(たびたび)」では、まち全体を巻き込み、森林との関係人口を増やしたいという思いから生まれた。また、森林産業に関わる若者やクリエイターが定期的に集まり、資源調査や森林教育プログラム作成などの研究会も定期的に開催している。土砂災害リスクの低い森づくりを実現するためには、林業界に限らずさまざまな事業者や行政、地域が連携して進めることが重要である。

谷林業株式会社 代表取締役 谷 茂則 氏

奈良県北葛城郡で江戸時代から続く同社で林業家として活動してきた。林業全体を大局的に見たとき、複雑な流通構造のため木材生産だけで維持するのは困難と考えた。そこで、かつての吉野林業の姿から、森林に新たな価値を生み出すには林業への挑戦だけでなく連携が必要と考え、新たな仲間探しと連携体制の構築を始めた。自社の里山で開いた野外フェスティバルでは、木の伐採などのレクリエーションのほか、アートや音楽、クラフトなど様々なイベントを開催した結果、2日間で5,000人が参加した。このイベントをきっかけに異業種が連携することの重要性を学んだ谷氏は、障がい者就労支援団体と連携した薪づくりや、薪ストーブ販売会社の立ち上げなど、林業家としての活動だけでなく、新しいジャンルに挑戦し続けている。様々な人との出会いやつながりの中で新たな森林の価値を見つけている。

VUILD 株式会社 COO 井上 達哉 氏

デジタルテクノロジーを使って林業と建築をつなげる活動を行っている。具体的には、人の手では技術的に作ることが難しい製品をデジタル加工機で生産することで、中央集約型の大量生産から地域分散型の個別生産へのシフトを目指している。また、共創型の場づくりを重視しており、単にデザイン集団が制作するだけではなく、住民と一緒に公共の場をつくるというプロセスのデザインも行っていることが特徴である。また、林業のマイクロ六次産業化の取組では、広葉樹や根曲がり材などの未流通材をデジタル加工機により製品化することで新たな収益を確保し、林業家の所得倍増を目指している。さらに「たんころ運動」では、山に捨てられがちな「たんころ」と呼ばれる木の部分を自分たちで運搬し、デザイン加工し、販売するという活動を行っている。デザインとテクノロジーの力で、林業に関わる人々をエンパワーメントすることで、社会課題を解決しようとしている。

## 【3】討論のまとめ

3名に共通するものは、周辺を巻き込みながら、川上から川下までの流通の中で分断された関係を紡ぎなおす活動をやっていることだという意見が出された。材積や収益など目に見える物差しではなく、「そこに愛はあるのか」という定性的な視点で森との関わりしろを増やしていくことに、森林に新たな価値を創造する上でのヒントがあるのではないだろうか。

記録: 佐藤 丈史(地域活性化センター・山形県米沢市より派遣)



奥川 季花 株式会社ソマノベース 代表取締役

高校時代に紀伊半島大水害により被災したこときっかけで、災害リスクの低い山づくりをしたいと思うようになり、現在は災害リスクの低い山づくりを目指し設立した(株)ソマノベースの代表取締役をつとめる。育てた苗木が木材製品として戻ってくる、購入者が山づくりに参加できることを新しい形の觀葉植物「MODORINAE」を発表し、林野庁補助事業のWood Change Awardにてプロンズ賞を獲得、その後同製品にてクラウドファンディングを成功させる。大学時代からソーシャルビジネスに関わる活動をしていたこともあり、社会課題を解決していくビジネスにとても関心があり、林業を通して防災をしていくことはもちろん、大好きな地元和歌山県に関わる人を増やすことを目指す。造林業を営む(株)中川のフォレストワーカーとしても勤務。



井上 達哉 VUILD 株式会社 COO

1984年生まれ。岡山県西粟倉村在住。西粟倉村の地域材サプライチェーンを構築し間伐材プロダクトの製造販売事業を行う(株)西粟倉・森の学校の代表を経て、次世代型アーキテクト集団のVUILD(株)のCOOに就任。職住一体の田舎暮らしリモートワークを続けながら、ライフワークとしてマイクロ6次産業化の推進、タンコロ運動、山主を面白がる会、ちょうどいい材木ラジオ等、小さな林業や森と暮らしを繋ぐ横断したプロジェクトを行っている。



谷 茂則 谷林業株式会社 代表取締役

大学卒業後、谷林業(株)に入社。約10年かけて同社の財務基盤を整理し、財務体質を強化した。その間、税理士、宅地建物取引士等の資格を取得。その後、作業道開設を含め現場で林業に従事、林業関係資格を10以上取得。また、若くして意欲のある人材を幅広く募集し、新たに社員として採用してきた。開業の森プロジェクト発起人。現在、(一社)大和森林管理協会理事。森林林業の未来を信じ、斬新な視点で取り組んでいる。



座長: 水谷 伸吉 一般社団法人 more trees 事務局長  
1978年東京生まれ。慶應義塾大学を卒業後、㈱クボタで環境プラント部門に従事。その後インドネシアでの植林団体に移り、熱帯雨林の再生に取り組む。2007年に坂本龍一氏の呼びかけによる森林保全団体「more trees」の立ち上げに伴い、活動に参画し事務局長に就任。

## 木育さん、いらっしゃい！～「行動変容」に繋がる木育とは～

## 【1】企画の趣旨

本企画では、木育によってそれまでの考え方を変え、新たな道を進み始めた人から生の声を聞き、何が行動変容を起こしたのかを探る。それによって見えてきた要因から、これから木育がさらに広く浸透していくために必要な視点を考える。



## 【2】各報告概要

木育さん No.1 : 長野 麻子 氏 長野氏は、林野庁木材利用課長に就任したのをきっかけに木育の面白さにはまっていった。仕事がら、木育分野のイベントに出席することが多かったが、各イベントは参加型で構成されており、子どもはもちろん大人も楽しそうな様子を見て、木育に残りの人生をかけたいと思うようになったという。その後、早期退職し、日本の森を盛り上げる会社「株式会社モリアゲ」を起業。森林は先人たちが手入れをし続けてきたから残っているものであり、森林への恩返しの気持ちも込めて、次の世代につないでいくという思いを原動力として活動している。

木育さん No.2 : 千葉 泰生 氏 秋田県の大館市内には屋内で遊べる施設がなく署名運動が起きていた。そんな中、林業を担当する千葉氏は、おもちゃ美術館との出会いにより、木と触れあえる空間づくりや木育に魅力を感じ、出会いから1年後にウッドスタート宣言を実現させた。また、林業・木材産業分野では男性との関わりが多いのに対して、木育の現場では女性が非常に多く、木育に携わり始めてから女性と接することが増え、視点が変わったという。地元の支援学校では、生徒のアイデアで校内のプラスチック製品を木材の備品に変えようという「ウッドチエンジ」が始まり、木育の輪が広がっている。

木育さん No.3 : 高橋 圭子 氏 高橋氏は、花巻おもちゃ美術館の完成前に同館が入るビルで開催された木育イベントに参加し、木のおもちゃの魅力にはまり、おもちゃ学芸員となる。高校の美術講師でもある高橋氏は、おもちゃ美術館と縁遠い高校生を連れて同館で授業を行っている。生徒たちにとって、林業の実態や森林の生態などについて学ぶ機会となっている。また、普段触れ合うことが少ない小さな子どもたちと一緒に活動するなど、学校ではできない体験をしている。環境問題や県の産業を考えるきっかけともなり、こうした活動が進路を考える時期にある高校生の刺激となっている。

木育さん No.4 : 中根 麻由美 氏、ご家族 中根氏は、おもちゃコンサルタントの講座を受け、森の中で木育活動を行うニッセの森に参加したことがきっかけで、小さいころから自然に親しんできた夫と二人の子どもと一緒に、家族で森や木に親しんでいる。ニッセの森の木を使って作った巣箱は、製材所で製材するところを見せてもらい、その後は自分たちで切って組み立て、森の木に掛けた。その巣箱には鳥が入り、子育ての様子を家族で見守った。またチェーンソーで木を倒す様子を子どもたちが目の前で見ている。こうしたバーチャルではないリアルな体験は貴重であり、今後も親子で森での活動を広げていく。

## 【3】討論のまとめ

木育に取り組み始める入口はそれぞれ違うが、木育を通してそれぞれのやりがいや生きがいを見出している。木育が、現代において求められている森林環境の保全や環境問題への取り組みなどに、自然な形で貢献できるきっかけになっている。また、4人の報告では、木育の活動において「身体性」と「つながり」の二つの点が共通していた。手に触れる、現場に行ってみる、音を聞く、匂いを嗅ぐというような身体性を伴う体験をし、そして、誰かとつながっているということを、木育を通して体験している。身体性とつながり、それがある場所に飛び込んでいくことが、木育の楽しみ方を拓げ、広く浸透していく視点になると考える。

記録: 阿部 香奈子(地域活性化センター・秋田県由利本荘市より派遣)



木育さん No.1 長野 麻子

■略歴 1994年4月 農林水産省入省  
2018年7月 林野庁木材利用課長  
2022年6月 早期退職  
2022年8月 株式会社モリアゲ起業



木育さん No.3 高橋 圭子

■略歴 2000年4月～ 高橋圭子びじゅつ教室運営  
2001年4月～ 市内高校美術講師(現:2校担当)



木育さん No.2 千葉 泰生

■略歴 2011年 地元高校卒業・大館市役所建設部下水道課  
2013年 異動: 産業部農林課(現: 産業部林政課)  
2020年 林業・木材産業分野10年目  
サイバード大学 IT 総合学科入学(現3年生)



木育さん No.4 中根 麻由美

■略歴 地方銀行20年、パン屋8年  
地域子育てセンター ゆりかもめ 勤務  
NPO法人子どももーぶ袖ヶ浦 活動中



座長: 小友 康広 株式会社小友木材店 代表取締役

1983年岩手県花巻市に創業1905年の(株)小友木材店の長男として誕生。幼少期より経営に興味を持ち、大学卒業後「木材業の発展のためには今伸びている産業や企業のことを学ぶべき」と思い、IT企業である現スターイアホールディングス(株)に2005年新卒入社。担当新規事業の成長をきっかけに、2009年に分社化、役員就任。2014年父親の他界をきっかけに(株)小友木材店の代表就任と同時に2拠点居住を開始。現在は東京と岩手で6社経営中。



コメントーター: 大谷 忠 東京学芸大学大学院教授  
富山県出身。東京農工大学大学院連合農業研究科博士課程修了、博士(農学)。博士(教育学)。第1回木育サミット(東京学芸大学にて開催)から参加し、学校での木育活動や社会における木育加工と木育との関わり等について取り組んでいる。東京都木育支援事業委員会、芸術と遊び創造協議会理事(木育担当)等を務める。

姉妹館運動企画 『おもちゃから考える森のこと』in木曾おもちゃ美術館

## 【企画の趣旨】

木のおもちゃで遊ぶとき、遊んでいる人にはそのおもちゃを作った人やおもちゃのふるさとである森は見えにくく、一方でおもちゃを作っている人には、おもちゃのふるさとの森は見えるが、そのおもちゃで遊ぶ人へおもちゃに込めた想いやふるさとの森のことは伝えにくいのが現状である。この企画では、まずおもちゃ作家に木のおもちゃづくりに込める想いや伝えたいことを伺う。次におもちゃや遊びを通じて、木のこと森のことをより知るきっかけとなる、小さなアクションを起こす、その為の方法としての「遊び」を紹介することを趣旨とする。2022年11月に開館した木曽おもちゃ美術館を舞台にインタビュー、ワークショップを行った。



## I ナルカリ インタビュー



[概要]

まずは、即興で注文した動物を糸鋸で切り抜く「糸鋸寿司」からスタート。樹齢80年のヒノキの間伐材を使って、木曽馬などが制作された。職人の技術を間近で見る機会は、子ども達にも与えたい。ナルカリは、長野には沢山の樹種があることを伝えるため、なるべく多くの樹種でおもちゃを作るようしている。中でもカラマツは、成長過程でねじれることが多いため建築には使いづらく、積極的におもちゃ作りに活用している。夏目と冬目のコントラストがあり、時間が経つにつれて独特な色を出すカラマツ。その特徴を活かして作られるおもちゃにこれからも注目をしていきたい。

## [まとめ]

木のおもちゃには様々な思いが込められている。作り手の思いと技術が込められたおもちゃには、作り手自身の「モノづくりの楽しさ」という力が込められているように感じる。一方、おもちゃの材料となる木材には、大自然を相手に、何十年も手塩にかけて木を育ててきた林業家の「自然に対する敬意」が込められているのではないか。私達は、できあがったおもちゃから発せられる思いや願いに気付き、さらに思いを馳せていく事が必要だろう。

## II 木曽町の子どもたちと一緒に遊ぶワークショップ

## 【概要】

今回のワークショップでは、プレオープンに訪れていた地元木曽町のこと  
も園の園児約20名、先生4名に参加いただき、講師である岡田哲也氏の  
進行の下、約15分程度のワークショップを実施した。使用したおもちゃ  
は、木曽のヒノキで作られた積み木。手のひらサイズの小さな動物たちが  
形取られたユニークなデザインは、それだけでも子どもたちの遊び心を  
くすぐる。今回のワークショップでは「自分と同じ動物を持っている子ども  
とペアになる」、「木の匂いを嗅いでみる」、「手のひらや頭の上に乗せて回  
転する」、「手の中に隠し、どっちの手に入ってるか当てる」、「横になった  
先生の上に乗せてみる」という5種類の遊びを展開。園児も先生たちも、  
終始笑顔の絶えない明るいワークショップとなった。

「まとめ」

「手のひらの上の森」とも言われる木のおもちゃ。今回の企画ではおもちゃを通じて、そのぬくもりやおいを子どもたちに感じてもらうことはもちろん、その為の「伝達方法としての遊び」を導入することで、いわゆる「おもちゃ美術館らしい」メッセージが届けられたのではないかと思う。また、同美術館の提唱する「おもちゃの遊び方は1つではない」という理念を加えた事により、保育者や子育て世代などの層にも、木育をより親しみやすいものとして伝えられたのではないかと考える。



ナルカリ 木のおもちゃ&雑貨 ナルカリクラフト

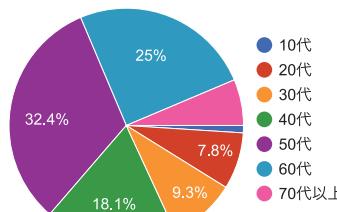
本名は草刈成雄(くさかりなるお)。1968年大阪府高槻市生まれ。大阪芸術大学美術学科卒業後、デザイン会社勤務などを経て妻の実家の木曾に移住。そこで木工に出会い、長野県立上松技術専門校で家具作りを学ぶ。卒業後、1997年にナルクリラフトを設立し木のおもちゃ製作を開始。2005年から糸鋸寿司という切り抜き実演を始め、電動糸ノコショーなどの糸ノコパフォーマンスを展開。映画制作部門スタンダードカリによる木の人形ストップモーション映画「ミラクルトイズリカバーザ・ドクター」が、滋賀国際映画祭2022審査員特別賞受賞作品、福岡インディペンデント映画祭2022 インディペンドスピリット賞を受賞。



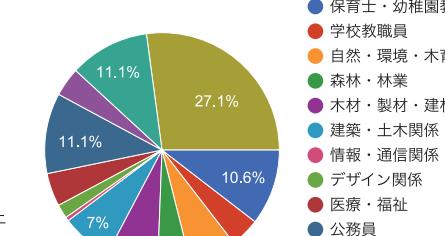
**岡田 哲也** 特定非営利活動法人 芸術と遊び創造協会 連携事業室  
東京おもちゃ美術館ディレクターとして、展示・イベント等の企画、運営に携わる。現在、東京おもちゃ美術館及び、全国の姉妹おもちゃ美術館の人材育成などを担当し、全国の幼稚園・保育園・子育て支援センター等で、おもちゃと遊びを広げるワークショップを展開。またおもちゃのデザイナーとして、おもちゃを使ったあそびの研究・実践を行っている。

 アンケート

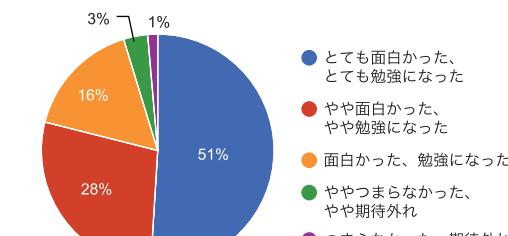
## ◆ 年齡



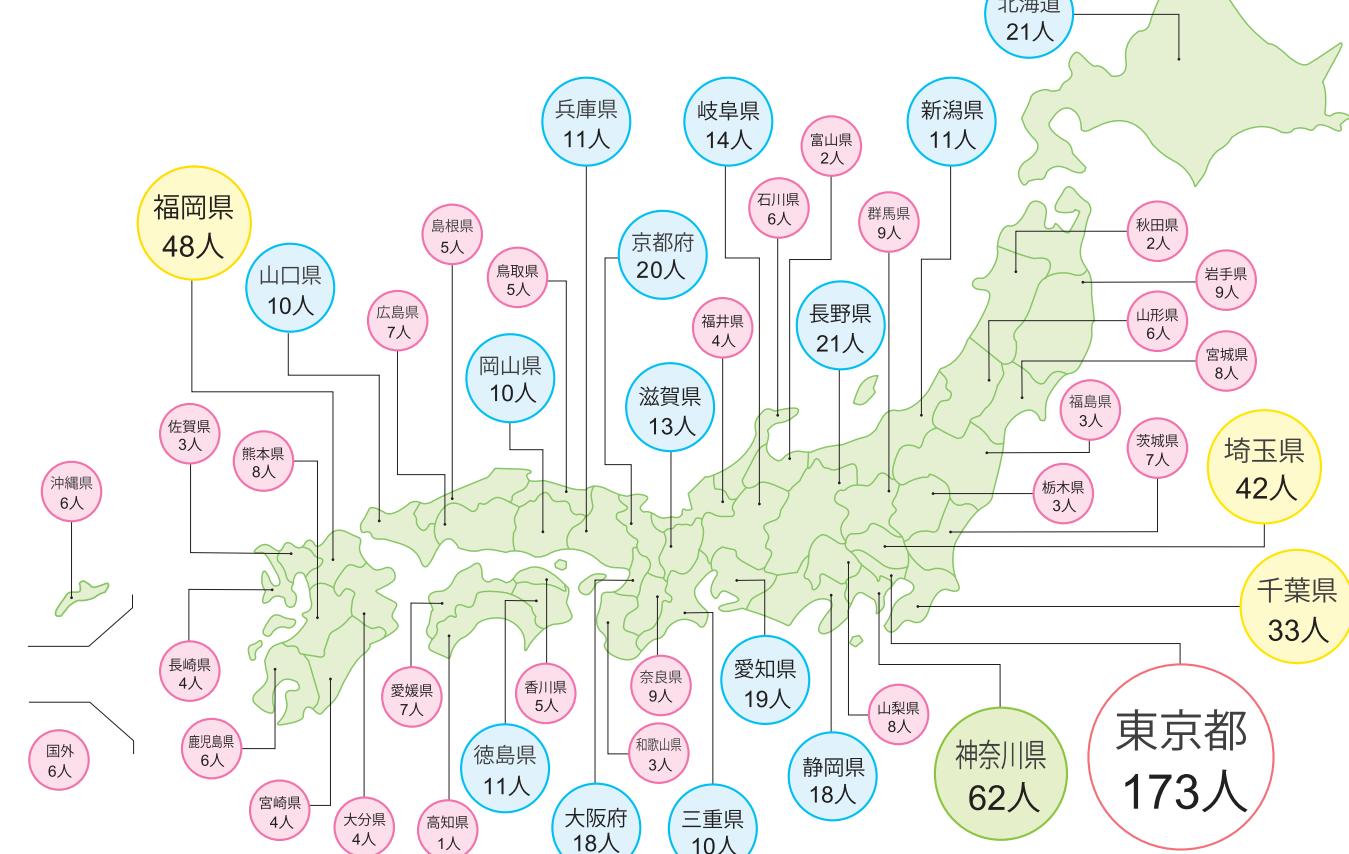
◆ ご職業



◆ 滿足度



◆ お住まい



[参加者からの声]

- ・養老先生の記念講演は、先生の人生のうえに語られる大きく広く温かい話で、聴いている側の度量も試されるような時間だと感じました。とても印象的な講演で、コーディネートに尽力された方に敬意を表します。
  - ・同じ木材業界の仲間が本当に素晴らしいプロジェクトを完成させて、すごく刺激になりました。苦労より、楽しんで仕事をしていることへの充実感が伝わってきました。
  - ・今まで、環境問題や気候変動による CO<sub>2</sub> の排出削減のため、森林保全や木の製品を活用していくことは重要だ、という漠然としたことしか考えていませんでした。しかし、本当に災害が起らなければ環境問題の重大さに気づかない、林業単体で採算をとるのは難しいなど、現実を突きつけられた気持ちになりました。環境に優しいというだけない、それを超えた面白さが必要だと思いました。
  - ・森に携わっている出演者の熱量に感心しきりでした。その中で、市民感覚の木育を代弁してくれる第3分科会の企画に、自分でもできる！感が確認できてよかったです。

木育共同宣言は、様々な業種・業界が木育によって繋がり合い、木育を通じて持続可能な社会の構築に貢献しようという意志を宣言するものです。第6回の徳島大会よりはじまり、前回大会までに1148の企業・団体・個人からご賛同をいただきました。今年度は新たに405の企業・団体・個人にご賛同をいただいています。

## ◆ 2022年度木育共同宣言 ◆

「木とふれあい、木に学び、木でつながる」木育活動を通して、

1. 森林と地球環境の保全につとめ、  
持続可能な社会の実現を目指します

2. 素晴らしい木造伝統技術や木の文化を継承し、  
これらに親しみ大切にする心を育てます

3. 我々の暮らしの中に木を取り入れ、  
社会的な課題の解決を目指します

4. 豊かな森林資源の有効利用を促進し、  
日本社会の活性化を目指します

5. 子どもたちの豊かな心、  
感性と人間性を育む環境づくりを目指します

『木育』という言葉は、2004年に北海道で初めて提案され、2006年には「森林・林業基本計画」において「市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、多様な関係者が連携・協力しながら、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、「木育」とも言うべき木材利用に関する教育活動を促進する」と明記されました。これを受けて、林野庁では木育を推進するための委員会設置や指導者の養成を進めてきました。また全国各地のNPOや団体が木育活動を開始し、木育によって、人と森林との関わりを主体的に考えるための取り組みを実施してきました。こうした動きの背景には、1997年に京都で開催された気候変動枠組み条約第3回締約国会議(COP3、京都会議)において採択された京都議定書があります。この議定書の中で、初めて森林(樹木)の二酸化炭素の吸収機能が明記され、世界的にも森林の二酸化炭素吸収機能が着目されることになりました。これを契機に日本では「木づかい運動」が提唱され、さらには、「木育」の多様な取組をスタートさせる原動力となり、このことは森林・林業・木材関係者にとっては大きな励みとなりました。また、2015年に国連サミットで採択された『持続可能な開発目標(SDGs)』に対しては、木材利用による直接的・間接的な貢献が可能であり、政府だけでなく市民レベルでの様々な連携の構築や取り組みを進めていかなければなりません。このような持続可能な開発に基づいた経済発展と社会的課題の解決を両立していくためには、SDGsの精神にある環境、人権、平和を目指して、木とふれあい、木に学び、木でつながる木育活動を普及・推進していくことは重要な取り組みの一つになります。木育によって培われた感性や体験が、循環型社会の実現において、心の中の軸となり、すべてのいのちが尊重される社会の実現へとつながります。

日本国内においては、2019年度から森林環境税の譲与が開始され、2024年には本格的にスタートすることになります。山林を多く抱える地域だけでなく、都市部においても森林整備とそれに伴う森林(樹木)の地球温暖化防止機能の啓発やその促進に対して取り組んでいかなければなりません。この背景には、2010年に「公共建築物等木材利用促進法」が施行され、木材の利用が進められてきたことがあります。さらに、「2050年にカーボンニュートラル実現のために脱炭素社会を目指す」ことが、環境省等を通して2020年に宣言されており、炭素を減らす試みや炭素を固定する試み等、多方面からの総合的な対策が必要になってきています。このような現状の中で、国内の森林整備や林業、木材利用の活性化等を進めることができ、脱炭素対策のための重要な内容として取り上げられており、2021年に脱炭素社会の実現に資する等のための木材活用と森林整備につなげる法改正がなされています。

また2020年以降、日本だけでなく世界全体が新型コロナウイルスの大きな影響を受けています。このウイルスは、グローバリゼーションを背景として、気候変動や無秩序な開発による生態系の変化、そして人と野生動物の距離が変化したこと、急速に全世界に広まったと言われています。だからこそ私たちは、もう一度自分たちの暮らしと自然との関係性について、考え直す機会にしなければなりません。すでにヨーロッパでは、コロナ禍からの復興を持続可能な社会づくりに活かす「グリーン・リカバリー(緑の回復)」や「ビルド・バック・ベター(よりよい復興)」が議論され、具体的に施策が進められています。翻って日本においては、単にコロナ以前と同じような経済復興を目指すことばかりが強調されています。そうではなく、人と人のつながりの視点や人と自然とのつながりの視点から、我々の日本社会を新たに見直していくことが大切になってきました。いまやすべての人が脱炭素社会の実現や、SDGsの実現を目指して、行動を起こしていくことが求められているのです。そして木育の目的のひとつが、「持続可能な社会づくり」であるとするならば、コロナ後の社会のあり方を考え、人間の暮らしと自然との関係性の「もやい直し」(※)をするためにも、木育が果たす役割は、さらに高まつくるものと考えます。

※もやい直し・・・元々は、船と船をつないで、バラバラにならないようにすること。転じて、水俣病の発生によって、分断された人々とや壊れてしまった自然と人間との関係を再構築するために、さまざまな立場を越えて、共通の目標に向けて、対話し、協働して取り組むことを指す。

このような中、「ウッドチェンジ(木の利用を通じて持続可能な社会へチェンジする行動)」、すなわち「鉄・コンクリート・プラスチックの社会」から「木材の社会」への転換が木育活動を通して期待されるようになりました。これまで以上に、私たち一人ひとりが、日本の森林(樹木)のCO<sub>2</sub>吸収による地球温暖化防止機能の認識を高め、暮らしと森林と地球環境の関係性を意識しながら生活する時代を実現していかなければなりません。そこで、今日、私たちは、木育を中心に据え、業種・地域・年齢など様々な枠を超えたアプローチや連携を取りながら、次世代の優れた人材を育て、日本国内の森林・木材が抱える課題解決に立ち向かい、国際社会においても責任を果たすべく、木育共同宣言をいたします。私たちが実施している木育活動が、この5項目の木育共同宣言のどの項目に該当して実施しているのかを確認しながら、明確な目標を持った木育活動の普及に尽力することに努めます。

# 沖縄木育サミット

特定地域ならではの木育の事例を紹介しながら、木育の意義や効果を確認し、その地域でのさらなる木育推進を図るため、川上・川中・川下、あらゆる団体と連携しながら、「県版木育サミット」を開催する。今回県版サミットの開催地は、沖縄県。2021年には、県北部「やんばるの森」が世界自然遺産に登録され注目度が高まっており、さらには、2019年に焼失した首里城復元にあたり県産木材が活用される動きも生まれている。沖縄の地で、地域特性をふまえた「沖縄ならではの木育」について、語り広げる機会となった。

## 開催概要

- 日 時：2023年1月15日（日）  
13:00～16:15
- 主 催：特定非営利活動法人 芸術と遊び創造協会
- 共 催：沖縄県、国頭村
- 会 場：琉球新報ホール
- 後 援：（一社）沖縄県私立保育園連盟、株式会社琉球新報社、  
株式会社沖縄タイムス社
- 参加者：250名



## 開会セレモニー



### 開催地挨拶

はいさい、ぐすよー、ちゅーうがなびら。

本日、ここに「沖縄木育サミット」が開催されるにあたり、御挨拶を申し上げます。お集まりの皆様には、日頃から県産木材の利用推進をはじめ、森林・林業の振興に関し、多大なる御支援・御協力を賜り、感謝申し上げます。また、本日のサミットが、木工品製作、子育て・福祉など各方面の皆様が集う形で、開催されることに対し、お慶び申し上げるとともに、主催者・関係者の御尽力に深く敬意を表します。さて、林野庁を中心に全国的な取組が展開されている木育活動は、木材に触れ、木を知り、森のことを考え、森と人との繋がりに思いをめぐらせるきっかけとなる取組など、子供の豊かな心を育むほか、地元にある豊かな森林資源の活用にもつながる重要な取組と考えております。また、木育の目標の一つには、木の良さを知り、木材利用の文化と伝統を次の世代につなぐというものがあります。このほど、県産木材のオキナワウラジロガシが首里城再建用の木材として、県民の皆様が見守る中、ヤンバルから首里に運びこまれた木曳式（こびきしき）は、記憶に新しく、本日のサミットがこのような折りに、開催されることは、意義深く感じるものであります。

ご来場の皆様には、沖縄だからこそできる木育の姿を考えていただくよい機会となりますことを、期待しております。沖縄県といたしましても、今後の木育を一層盛り上げるよう、主催者をはじめ、各関係者と一体となり、取り組んでまいります。結びに、本日のサミットにおいて、県民の皆様の木育への理解が深まりますとともに、本県の木育に関する取組が、ますます活発になりますことを祈念しまして、御挨拶いたします。 いっぺー、にふえー、でーびたん。ありがとうございました。

2023(令和5)年1月15日 沖縄県知事 玉城 デニー（照屋 義実副知事による代読）



### 来賓挨拶 林野庁 森重樹次長

戦後、先人の手により造成された我が国の森林資源は、今、まさに利用期を迎えており、豊富な森林資源を活用して、地域の林業・木材産業を持続的に成長発展させるとともに、若い森林を確実に造成し、2050年カーボンニュートラルに寄与するためには、「伐って、使って、植えて、育てる」という森林資源の循環利用のサイクルを確立することが必要である。特に、建築物等に木材を利用することは、樹木が吸収した二酸化炭素を建築物に長期間貯蔵できること、また、木材は他の資材と比べて材料製造時の二酸化炭素排出量が少ないとから、脱炭素社会の実現に貢献する。また、木材を供給する山村地域に収益をもたらし、雇用を創出し、地方創生にもつながる。このような背景から、2021(令和3)年に「都市(まち)の木造化推進法」が施行され、木材利用を拡大する対象が公共建築物から民間を含めた建築物に拡大された。また、同法における国の責務として、教育活動、広報活動等を通じて、木材利用の促進に関する国民の理解を深めること等が定められた。こうした状況の中、木との触れ合いを通じて木の良さを感じつつ、子供から大人まで幅広い世代の皆様に木材利用の意義について学ぶ機会を提供する「木育」の役割は益々高まっている。ここ沖縄県は、2021年に世界自然遺産に指定された「やんばるの森」をはじめとした類いまれなる豊かで美しい自然を有している。そのような中、人が植えて育てた人工林について、徐々に利用が期待される状況となってきたと聞いている。沖縄県ならではの個性豊かな木々が、その個性に応じて暮らしや町の中で利用が進むよう、沖縄県の皆様の木材利用に対する理解が深まる機会として木育活動の更なる展開を期待する。折しも沖縄県では、首里城が復興の途上にある。県内、県外から集められた選りすぐりの木材により、沖縄の文化と歴史の象徴ともいえる首里城が見事に復興され、これまでにも増して県内外の方々から永く愛されることを願ってやまない。

## 沖縄県 ウッドスタート宣言調印式



(写真左から) 国頭村 知花靖村長、芸術と遊び創造協会 多田千尋理事長、沖縄県 照屋義実副知事、林野庁 森重樹次長

2023年1月現在、市区町村では54自治体、都道府県では3自治体がすでにウッドスタート宣言をしており、沖縄県内では国頭村が2013年にいち早く宣言をしているが、今回、県をあげてのウッドスタート宣言が実現。沖縄県と芸術と遊び創造協会とが連携・協力しながら、県内市町村が木育を推進できるよう環境整備・取組支援等を行っていくことが誓われた。



## 基調講演 ①

### 「琉球王国の木育政策と首里城の復元」

琉球大学 名誉教授 高良倉吉氏

沖縄木育サミットの最初のプログラム 基調講演①では、琉球大学名誉教授で、平成そして令和の首里城復元のリーダー的存在でもある高良倉吉氏による「琉球王国の木育政策と首里城の復元」を聞いた。もちろん琉球王国時代に「木育」という言葉はない。しかし17世紀半ば、三司官の一人である蔡温が行った様々な政策は、まさに現代において木育を進めるにあたって、参考になる視点がいくつもあるとの高良氏の指摘は、まさに的を射るものであった。まず高良氏が指摘したのは、蔡温が生きていた17世紀の琉球王国と現代の沖縄の「共通点」である。蔡温が生きていた時代、人口増加に伴い建築需要が増大し、薪炭材の消費も拡大した。



また海運の発達に伴う船舶の増加、サトウキビの栽培技術が移入され、砂糖生産にも莫大な木材を使うようになった。一方で、島津氏の琉球侵攻以降、財政は窮乏化し、逼迫していた。そんなときに起こったのが、二度にわたる首里城の焼失である。ところがその復元において、琉球王国内で木材を調達しようとしても、大径木の材は国内ではなく、結局島津藩から購入しなければならなかった。このことを重く見た蔡温は、木材の自給自足を目指すべく、いわゆる松山制度の改革に踏み切る。徹底的な現地調査に基づき、長期的な視点からの伐採計画を立て、森林の保護及び林業の振興という、一見対立しそうな概念を一つに止揚したという。実はいわゆる平成の首里城復元の際にも、何とか沖縄県産材を活用しようという動きがあったそうだが、結局県内には、大径木の材がなく、ヒノキは台湾から、イヌマキは九州から、ウラジロガシは奄美から「輸入」。残念ながら、県産材はほとんど使うことができなかつたそうである。その反省に立って、まさに長期的な視点から、例えばイヌマキの植林を子どもたちとともに始めたとのこと。イヌマキは、材料としてもとても強い材のため、修理が必要になるまでの期間が長く取れる。その分、財政の負担も軽くなるので、今後の修理を見込んで、さらには子どもたちにもその意義を伝えながら、植林活動が始まった。まさに首里城を舞台とした「木育」と言える。残念ながら、そのイヌマキが育つ前に、首里城は2019年10月31日、またしても焼失してしまった。そして迎えた「令和の復元」。真っ先に、県内で調達できる材の確保に走ったところ、今度は北部やんばる地域にある国頭村が名乗りを上げたそうである。オキナワウラジロガシの大径木が残っているという。

そこで先日、この木を切り出し、古式ゆかしい「木挽き式」を行って、数多くの県民に見守られながら、首里城に運ばれた。会場ではそのときのビデオも流されたが、誰もがこの木を大切そうに触っているシーンが印象的であった。令和の復元においては、たまたま県産材の供給があったが、このままでは、当然、修理の際に必要な大径木を県内で調達することは甚だ困難である。世界自然遺産に登録された貴重なやんばるの森の保護と、首里城を支えるための長期的視点にたったやんばる林業の活性化をどう両立させていくかという、これまたとても難しい課題を、これから取り組んでいく必要がある。しかし、300年前に蔡温が示してくれた「道」から学ぶことで、その難しい課題の解決の糸口が見えてくるのではないか。また沖縄の方言には古くから伝わる「ヤマヌハギレー、ウミンハギーン」という格言がある。これは「山が枯渇すると、海も枯渇する。両方はつながっているので、どちらも大切にしなければならない」という意味である。こうした先人の知恵を学ぶことで、木を大切にする心を現代にも受け継げば、これから道が開けるそんな念を強くした。

## ◆ 基調講演 ②

### 「木育で躍動する地域～ウッドスタートは何をもたらすのか」 特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会 事務局長 馬場 清 氏

基調講演②では、まず全国で展開している東京おもちゃ美術館の木育の活動＝ウッドスタートについて紹介があった。これは東京おもちゃ美術館が全国の自治体と連携して行っている木育の活動のことと、今回のサミットで宣言するにいたった沖縄県、また2013年に沖縄県内で初めて宣言した国頭村を含む全国58自治体が締結しているという。その上で、このウッドスタートの効果として、「つなぐ」をキーワードに、地域が躍動する事例の紹介があった。例えば、誕生日い品を地域にある特別支援学校の木工科の生徒が作ることによって、インクルーシブなまちづくりに役に立った事例（北海道雨竜町）、おもちゃ美術館を、閉店した百貨店につくることによって賑わいを取り戻した事例（花巻おもちゃ美術館）、水源地の木材を利用することで森林の多面的機能の保存につながった事例（埼玉県秩父市と東京都豊島区）、廃れつつある木に関わる地域文化をおもちゃ美術館で「遊び化」することで伝承している事例（徳島木のおもちゃ美術館）、誕生日い品を通して「いのちの大切さ」を親子に伝えている事例（山口県長門市）など。木育の取組が「人と人」、「森林と都市」、「過去と現代」、「多様ないのち」を「つなぐ」ことで、地域を躍動させていることが伝わった。最後に、沖縄の木育、特に国頭村にある「やんばる森のおもちゃ美術館」についても話があった。ここには「蔡温松」を使った遊具や、やんばるの森のめぐみをふんだんに利用したおもちゃや空間がある。それらの価値や意味を伝えるのも「人」である。木育を進めるにあたっては、なんといっても「人」が重要なポイントになるということで話が締めくられた。



## ◆ パネルディスカッション 「沖縄での木育推進に向けて～森とまち、森とひとをつなぐ木育」

### 糸数 国浩氏(西原保育園園長) 木をふんだんに使った空間での保育の効果

当園は、子どもたちがハイハイする床や手すりなども木材を使用していて、木のぬくもりから安心感を与えるような空間になっている。積み木も充実させていて、積み木遊びからは、子どもたちが何かに見立てたり、造形の遊びをしたり、数の概念を理解したり、と様々な展開ができる事を実感している。年長クラスが首里城の見学をした後には、自分達で設計から組み立てまでをする「積み木の首里城」の製作などを取り組んでいる。木には、五感を豊かにする効果があると感じており、積み木を通して、友だちと一緒に何かを創ることの大切さとともに、建築までも学んでいくように見受けられる。

### 宇良 梨枝子氏(看護師、国頭村公認森林セラピーガイド) 森林セラピーから見える森の効果と高齢者にとっての木育

森林セラピーとは、癒し効果が科学的に検証された「森林浴効果」のことをいい、国頭村の森は、専門家による実験を行った結果、「森の癒し効果」が科学的に認められ、2007年に沖縄県内で初めて「森林セラピー基地」の認定を受けた。森林セラピーの効果の1番目には、ストレスの軽減が挙げられる。さらには、がんの予防効果もある。免疫力をつかさどるナチュラルキラー細胞が、森で2時間程度過ごすと日頃より20～30%増え、1か月後も、ある程度効果が持続することが分かっている（医学博士・李卿研究資料より）。月に1度、森を訪れるといのではないか、とデータでも示されている。訪問看護ステーションでの勤務時には、看取り期の利用者を、その方のミカン農園のある国頭村の山へお連れしたこともあった。山へ行くと自宅では話しづらいことも話し、表情もとても明るくなっていたことを今でも覚えている。都市部の人たちもやんばるへ目を向けていただき、木育を意識した森林セラピーを通して、病気になりにくい身体づくり、介護予防につなげていきたい。

### 生盛 翔大氏(沖縄女子短期大学2年) 若い世代の木のおもちゃづくりの経験からの学び

やんばる森のおもちゃ美術館で開催された「おもちゃ学芸員養成講座」受講をきっかけに、木のおもちゃのパワーに気づき、偶然大学内にあった「手作りおもちゃコンテスト」のポスターを見て、学生5名グループで木のおもちゃを作ることを決めた。作戦会議を重ねたうえで、沖縄の代表的な木・リュウキュウマツを使って、沖縄の食文化を伝えるおもちゃを作ろうと、ゴーヤーチャンブルー型の積み木を完成させた。大学や国頭の方々など多くの人に支援いただき、構想から完成まで約2ヶ月で仕上げることができた。コンテスト審査のコメントでは、「まさに沖縄らしい『ファーカンダ積み木』（ファーカンダ＝沖縄の言葉で「祖父母と孫」を表す言葉）」「会話が広がり、世代間の交流を生む、すばらしいおもちゃ」といった評価もいただき、結果は全国2位の優秀賞。今後商品化を目指し、沖縄の子どもたちのもとへ届けていきたい。

### 多田 千尋氏(特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会 理事長)

多世代交流を生む木育の原点は、「赤ちゃんからはじめる木育」と考えている。おもちゃ美術館には多くの赤ちゃん連れのパパママも訪れるが、「なぜこの空間だとあまり子どもが泣かないのだろう」と木の不思議な力にパパやママが気付く。その数年後、学習机を買うことになるが、その時に「木の机」と向き合うことになる。小・中・高・大学と成長につれて、どう木育をつないでいくか、ということについて、一つの活路として私が期待しているのが「電動糸鋸」。いま、全国のおもちゃ美術館にスイス製の電動糸鋸を置いている（やんばる森のおもちゃ美術館には2年後設置予定）が、そこで多くの人に体験してもらえると、自分の家にもほしいという人が出てくる。「一家に一台ミシン」の時代が過ぎ、これからは「一家に一台糸鋸」という時代が訪れ、木育が世代を問わずに広がる契機になるのではないかと展望を持っている。

コーディネーターの平良斗星氏からは最後に、今後の沖縄での木育推進に向けたヒントとなるようなメッセージが伝えられた。今回のパネルディスカッションは、保育から高齢者福祉まで、多世代につながる木育について話を聞くことができた。「医療」「保育」「子育て」と木育をかけ合わせるような話題が充実していたが、今後も「木育」をフックにして、様々な社会課題・地域課題につなげていくチャレンジが始まると、沖縄ならではの木育が継続、発展していくと考えられる。



### コーディネーター

平良 斗星（たいらとうせい） 公益財団法人みらいファンド沖縄 副代表理事  
那覇市生まれ。コミュニティFM・エフエム那覇プロデューサー。公共財団法人みらいファンド沖縄 副代表理事。みらいファンドによる「沖縄式地域円卓会議」は、社会課題解決の手法として全国的に注目を浴びる。そのほか、地域古写真のアーカイブと活用を目指したイベントも主催。



### ◆ パネリスト



糸数 国浩（いとかず くにひろ）  
社会福祉法人 小橋川福祉会 西原保育園園長

西原町生まれ。短期大学卒業後、横浜にて保育士として保育に携わる。その後沖縄に戻り、地元西原町にて現在の西原保育園で保育士・主任保育士を経て2022年度より園長に就任。園は身近な自然に触れる生活環境を大事にしており、園舎も様々な種類の木材を使い、木のぬくもりを感じる作りになっている。その他、積み木遊びなどにも力を入れるなど、子ども達が生活・遊びの中でも木に触れ親しむ環境の大切さを感じながら保育を楽しんでいる。



生盛 翔大（せいもり しょうた） 沖縄女子短期大学2年  
那覇市生まれ。首里高等学校出身。高校在学中にインドネシアで約1年間の留学を経験。卒業後、公益社団法人青年海外協力協会で国際理解教育のアシスタントを務める。保育を学ぶため沖縄女子短期大学に入学。クラスメイト4名と共に県産材を使ったゴーヤーチャンブルー型の積み木を制作、「手作りおもちゃコンテスト2022（主催・京進SCEグループ）」で優秀賞を受賞。



宇良 梨枝子（うらりえこ）  
看護師、国頭村公認森林セラピーガイド  
大宜味村生まれ。神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護学院卒業。1976年に帰郷、名護病院（現県立北部病院）や診療所での看護師をへて、2000年からケアマネジャーとして介護に携わる。2009年、森林セラピーガイド、2012年森林セラピストの資格を取得。



多田 千尋（ただちひろ）  
特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会理事長、東京おもちゃ美術館館長、やんばる森のおもちゃ美術館館長  
東京都生まれ。乳幼児から高齢者までの遊び・芸術によるアクティビティケア及び世代間交流の実践・研究に取り組む。2010年より林野庁の補助事業を受託し、2013年からウッドスタート事業を開始、「木育」を全国的な国民運動に押し上げる。木育のシンボルである「おもちゃ美術館」は2023年までに全国12館が創設され、赤ちゃんからお年寄りまでの多世代交流型の木育推進のけん引役も務める。

### ◆ 閉会挨拶



### 国頭村長 知花 靖氏

首里城の復興にあたり、平成の復元では県産材は使われなかったが、今回の令和の復興では、国頭村のオキナワウラジロガシが3本使われた。地元として非常に誇りに思うと同時に、先人たちに感謝をしている。国頭村は、2013年にウッドスタート宣言をし、木育に力を入れてきた。村内にあるやんばる森のおもちゃ美術館は、観光スポットとしてもより力を入れていこうと2022年4月より東京おもちゃ美術館の運営と同じ芸術と遊び創造協会が運営管理することとなり、今後、同館は増築拡大も予定している。国頭村では、小学校に入学する子ども全員に、国頭産材で作った机・イスを無償で提供している。高さが調整できるようになっており、6年間ずっと同じ机を使うことができ、卒業時には、自宅へ持ち帰るか、学校へ寄付するか選択制となっている。今後、木育を村としてもさらに推進していきたいと考えております。まずは、都市部の自治体へ呼びかけたいのは、森林環境譲与税の利活用。森林環境譲与税をぜひ木育推進に有効活用していただきたいと思っており、活用に困っている都市部の自治体には、ぜひ国頭の木材に注目してもらいたい。今年8月の山の日全国大会は、やんばる三村と竹富島での開催が決まっている。これを機にぜひ、やんばるまでお越しいただきたい。

## 木育推進ミュージアム やんばる森のおもちゃ美術館

世界自然遺産に登録された「やんばるの森」を遊びながら感じる体験型・木育推進ミュージアム。館内では、イタジイやリュウキュウマツなど、やんばるの森で育った木のおもちゃで遊び、そのぬくもりや美しさに触れることができます。現在も開館していますが、2025年春には、拡大リニューアルオープンを予定しています（下図はイメージバース）。



(やんばる森のおもちゃ美術館)所在地：沖縄県国頭郡国頭村字辺士名1094-1 国頭村森林公園内

## ◆ 東京おもちゃ美術館のウッドスタート活動について

### 山と人と地域をつなぐ「木のある暮らし」が産み出す「地域『木育』力」

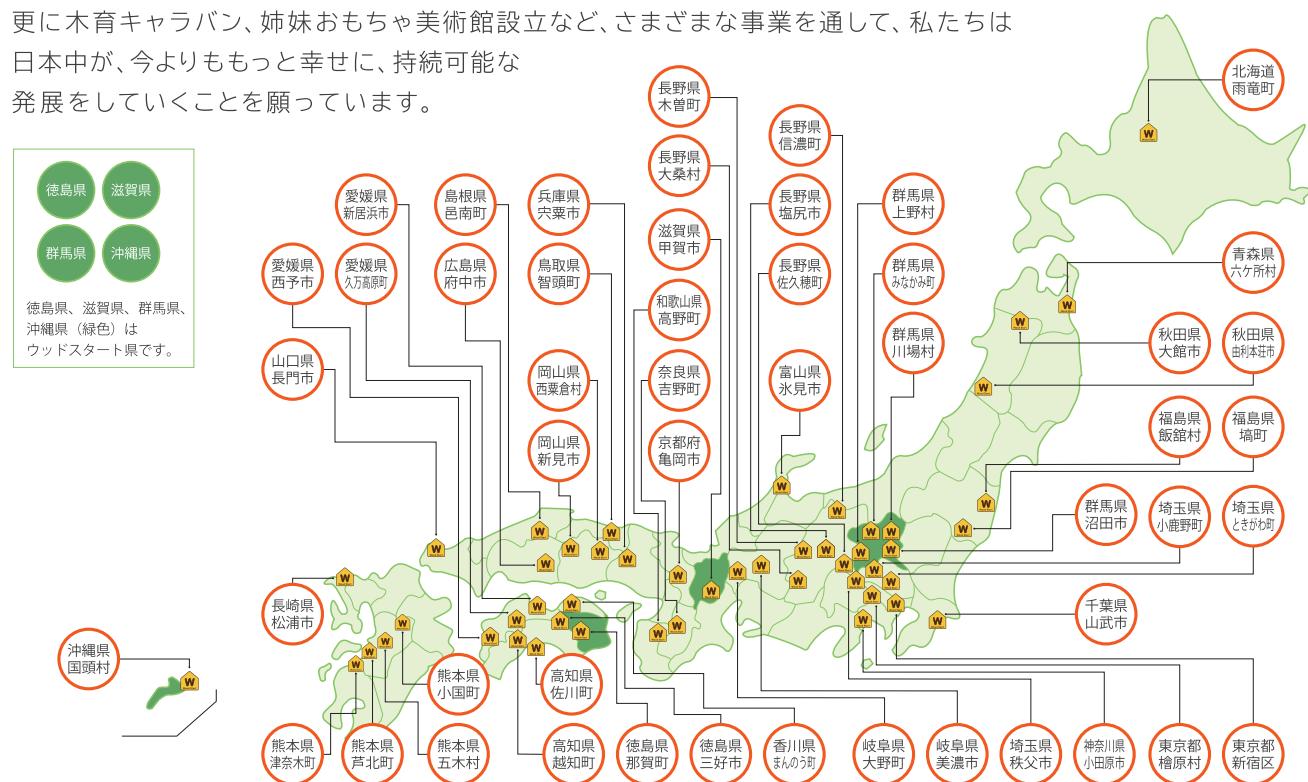
「ウッドスタート」は東京おもちゃ美術館が提案する木育の行動プランです。誕生日い品として日本の木のおもちゃを子どもたちに届けることによって、子どもたちの育つ環境に木を取り入れ、心を育みます。そしてその子どもたちや周りの大人が少しずつ日本の木や森に目を向け、持続可能な社会の実現への第一歩となることを目指します。

更に木育キャラバン、姉妹おもちゃ美術館設立など、さまざまな事業を通して、私たちは

日本中が、今よりもっと幸せに、持続可能な  
発展をしていくことを願っています。



徳島県、滋賀県、群馬県、沖縄県  
（緑色）は  
ウッドスタート県です。



#### ウッドスタート宣言自治体

\*それぞれ順不同。2023年2月現在。

北海道雨竜町・青森県六ヶ所村・秋田県由利本荘市・秋田県大館市・福島県飯館村・福島県国見町・福島県塙町・群馬県上野村・群馬県みなかみ町・群馬県川場村・群馬県沼田市・埼玉県秩父市・埼玉県ときがわ町・埼玉県小鹿野町・千葉県山武市・東京都新宿区・東京都檜原村・神奈川県小田原市・長野県信濃町・長野県塩尻市・長野県大桑村・長野県木曾町・長野県佐久穂町・富山県水見市・岐阜県美濃市・岐阜県大野町・滋賀県甲賀市・京都府亀岡市・兵庫県宍粟市・奈良県吉野町・和歌山県高野町・鳥取県智頭町・岡山県西粟倉村・岡山県新見市・広島県府中市・島根県邑南町・山口県長門市・徳島県那賀町・徳島県三好市・愛媛県西予市・愛媛県久万高原町・愛媛県新居浜市・高知県越知町・高知県佐川町・香川県まんのう町・福岡県那珂川市・熊本県小国町・熊本県五木村・熊本県津奈木町・熊本県芦北町・長崎県松浦市・宮崎県綾町・宮崎県日南市・沖縄県國頭村・滋賀県・徳島県・群馬県・沖縄県

#### ウッドスタート宣言園

めぐみこども園（福井県福井市）・美濃保育園（岐阜県美濃市）・下牧保育園（岐阜県美濃市）・グリーンヒル幼稚園（東京都八王子市）・もあな保育園（神奈川県横浜市）・陽だまりの丘保育園（東京都中野区）・かわい幼稚園（岐阜県可児市）・中野みなみ保育園（東京都中野区）・あすなろ幼稚園（東京都葛飾区）・松崎幼稚園（山口県防府市）・ひだまり保育園（群馬県沼田市）・ねむのき保育園（東京都町田市）・リーチェル幼稚園（静岡県富士見市）・福岡女学院幼稚園（福岡県福岡市）・パルシステム東京ばる★きっず府中（東京都府中市）・青梅幼稚園（東京都青梅市）・みのり保育園（東京都府中市）・田中保育所（東京都府中市）・関東学院六浦こども園（神奈川県横浜市）・もあなキッズ自然学校おだわら・もあな保育園（神奈川県小田原市）・高須幼稚園（高知県高知市）・高須第2幼稚園（高知県高知市）・アロハちがさきひがし保育園（神奈川県横浜市）・木育こどもの家新川園（北海道札幌市）・木育こどもの家屯田園（北海道札幌市）・ピオニイ保育園（東京都中野区）・木育こどもの家白石園（北海道札幌市）・木育こどもの家藤野園（北海道札幌市）

#### ウッドスタート宣言企業

\*現在、新規受付は行っておりません。

（株）良品計画・（株）内田洋行・タマホーム（株）・（株）こうゆう花まる学習会・（株）長谷萬・（株）GRIP'S・太田木材（株）・（株）高倉木材・一條ランバー（株）・パルシステム生活協同組合連合会・生活協同組合パルシステム東京・生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコーポ・認定NPO法人フローレンス・認定NPO法人NEXTEP・アステリア（株）・オークヴィレッジ（株）・ネットワカ和歌山（株）・まちのちから合同会社・イオンスタイル東戸塚・生活協同組合パルシステム千葉・ひらいホールディングス（株）・細田木材工業（株）・キッズベースキャンプ（株）・（株）グランツ・イーウンズ・（株）熊木住建・（株）山長商店・生活協同組合パルシステム埼玉・株式会社寺本木材

## ◆ 幅広いターゲットを見据えた8つの事業



地元の木工職人が、地域材で制作した木のおもちゃを赤ちゃんに贈る取り組みです。生まれてきた親子に木の魅力を伝えます。



木のおもちゃいっぱいの移動おもちゃ美術館は、子どもだけでなく、幅広い世代に木のおもちゃの魅力を伝えます。



木育のスペシャリストを養成する講座です。地域で、木と触れ合う場所を活かし、学びを提供し、木とともに生きる方法を提案していきます。



森林・林業・林産業に従事する人たちと、子育て支援関係者、自治体の担当者をシームレスにつなぎ、地域の将来を語り合う場です。



木に親しみ、木と共に生きていく「木育」の活動の見解を深めるイベント。講座形式のものから販売方式まで、幅広いチャンスをご提供します。



誕生日い品の紹介始め、木育に関する地域の取り組みを紹介していくための動画を作成。さまざまな媒体での広報戦略に役立ちます。



東京おもちゃ美術館の総合監修のもとで建てる「姉妹おもちゃ美術館」です。あらゆる木育の取り組みの「発信拠点」として、多くの方を招きます。



保育園やショッピングセンターなどさまざまなサイズの空間を木質化し、五感全てで木の魅力を感じられる空間の整備を行います。

## ◆ 全国に広がる木育推進拠点 姉妹おもちゃ美術館

東京おもちゃ美術館では、親子などの「多世代交流推進」と木のおもちゃや空間木質化による「木育推進」を行っており、現在我々は、このコンセプトにご賛同いただいた皆様と共に地域ならではの自然と文化の魅力溢れる姉妹おもちゃ美術館の設立を進めています。



## ◆ 2022年度開館の姉妹おもちゃ美術館

